令和４年度 全国高等学校総合体育大会（愛媛）審判員報告

C1:男子体操競技

男子審判長 近藤昌夫

令和４年度全国高等学校体操競技選手権大会は、８月７日～８月９日に愛媛県総合運動公園体育館において開催されました。コロナの第７波の影響を強く受けましたが、ほうほうの体で実施することができました。しかし、審判の中にも開催前に数名の陽性者が出てしまい、直前で近県から審判を補ったり、補審を塁審に当てたりして当日は補審が不足する状況になりました。さらには競技部長が不在になるなど、かなり厳しい状況で試合は進んでいきました。それに追い討ちをかけるかのように、今回は落雷のために競技が中断するというアクシデントに見舞われました。競技再開までに３０分以上を要し、どのように再開するのかを裁定審判で協議し、それを監督に伝達するなど瞬時の判断が必要になりましたが、みなさんのご協力のおかげで、無事に競技を続けることができました。過去に例を見ない緊急な状況にも適切な対応ができ安堵しております。

団体決勝は市立船橋高校が優勝となりました。予選の開始種目から決勝の最終種目にいたるまで安定した試合展開で、難度の高い技を取り入れながら、大欠点をできるだけ抑えて得点を高める戦いでありました。各種目において得点源となる選手がミスなく演技できたことも勝因の一つかと思います。個人総合では、谷田雅治選手(作新学院)が 84.964 を獲得して優勝しました。第 2 位には須永光輝選手(市立船橋)が 84.332、第 3 位には戎燿汰選手(清風)が 81.964 のスコアでメダルに輝きました。今回の種目別ではゆかと鉄棒を除く４種目で、団体上位校ではない学校から優勝者が出る結果となりました。これは各種目での採点が審判員宣誓で謳われているように、公平公正に行われている証拠でもあります。団体予選通過 16 位の得点は 216.15、17 位が 215.73 で前ルールよりもボーダラインが１点ほど下がりましたが、１点以内の接戦が毎年続いていることには変わらないようです。

競技は 2022 年版採点規則および 2022 年度版高等学校男子適用規則を採用しました。この規則になって初めての大会となりましたが、現場の選手や監督が高得点を得る為にどのような演技構成を組んでくるのかに注目しました。D スコアに関しては 6.0 以上に高めるのはなかなか難しいようで、たとえ９技になっても、E スコアを高めようという試みは感じ取れました。採点以外の部分で気になったことについて書き留めておきます。自分の前の選手が演技を終え採点して待機している時に、ゆかで跳ねて着地の練習をしたり、中には技を仕掛けてしまったりする選手が散見されました。また自分の種目が終わり他の種目を待っている際に、跳馬の助走路や着地マットで倒立をしたり次の種目のアップをしたりなどする選手も何人かいました。監督会議がコロナの為にここ数年対面で行うことができず書面でお伝えしていますが、書面では最低限の部分しか伝えられないために、これらマナーなどの細かい部分を確認させていただくことができずにいるのが原因ではないかと思っています。

最後になりますが、大会実行員会、高体連関係役員、愛媛県体操協会や補助役員、その他大会に携われました多くの皆様のお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

《ゆ か》

D1/E1　吉田　義経

１．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版高等学校男子適用規則の確認
・雄大なアクロバット的跳躍技において、先取りのある頭や腰の位置の高い着地を評価する。
・宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
・グループＩの旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。
・静止時間不足やアクロバット技の前の２秒以上の停止を厳密に採点する。

２．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について
・宙返りの連続において、２つ目の技で大欠点と判定した実施は組み合わせ加点なしとした。
・ひねり不足については厳密に判定し、90°を超える不足の場合は低い難度で認定した。
・静止技において明らかに静止が見られない実施は不認定とした。
・力技（力倒立群含む）を３技実施した演技においては、ゆか特有の特別な繰り返しに抵触するため、最も難度の高い２技を認定した。

■E スコアについて
・雄大で高さのある高難度の宙返り技で着地姿勢の高い実施を評価した。
・静止技において、正しい姿勢からの逸脱や静止時間を厳密に判定した。
・アクロバット技の前の停止時間を厳密に判定した。
・宙返りひねり技でのひねり不足やゆがみのみられた実施において相応の減点をした。

３．その他特記事項・意見・感想等

2022 年版採点規則においてゆかの演技時間が 75 秒に設定され、これまでの 70 秒から５秒延びました。延びた理由の一つとして、静と動を明確に表現した演技実施が求められていることが挙げられます。静の部分としては静止技と安定した着地であり、それ以外が動の部分となります。

D スコアの最高は予選決勝とも 5.8 点でした。昨年の 6.4 点と比べ大きく下がっていますが、技の統合や組合せ加点を得ることが難しくなったことが原因の一つであると考えられます。E スコアの最高は予選 9.033 点、決勝 8.966 点とすばらしい出来栄えで高い評価を得た実施でありました。終末技において着地を止めたと判定した実施は、決勝 84 演技中 14 演技と昨年度より減少していました。これは、アクロバット前の停止時間を意識したことも要因としてあるのではないかと推測されます。しかしながら高校適用規則において終末技の着地加点を設定し、着地を重要視していることからも日々の練習において意識した取り組みを期待します。２回宙返りなしによる ND0.1 となった演技は予選 73 演技で 30%、決勝５演技で６％と年々２回宙返りの実施が増えてきていることが伺えます。組合せ加点においては、宙返りの３連続による 0.1＋0.1（B＋D＋B）加点や２回宙返りを含めた宙返り連続の実施も見られました。

ゆかにおける目に見えるおもな減点として、すべての技の姿勢欠点、宙返りの高さ、角度の逸脱、ひねり不足、着地などがあります。また、目に見えないものとして時間（静止および停止）があります。立位から伸腕屈身開脚力倒立（静止）を例に挙げると、閉脚で正しい倒立姿勢になったところから静止している間の時間が計測されます。２秒に満たない場合、中欠点である 0.3 の減点を伴うことから、実際の静止時間と演技者の感覚の差をなくすことが必要となります。また、アクロバット技の前の停止については、アクロバットに向かう位置についた時点から足が動き始めるまでカウントされ、手や体の上下運動など動きのある捌きであっても計測は続きます。

日々の練習において意識することにより防ぐことのできる減点をなくし、質の高い実施を目指した上で D スコアアップへ向けた取り組みを期待します。

《あん馬》

D1/E1　森　直樹

1．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版高等学校男子適用規則の確認
・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに倒立に持ち込む捌きを評価する。
・演技全体を通して、安定感のある実施を評価する。

2．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下したものは不認定とした。
・フロップ技の連続において途中で落下したものは、すべて不認定とした。
・交差倒立技や倒立下りにおいて、上げた脚や腰が下がったものは不認定とした。
・倒立下りにおいて倒立の角度逸脱が 45°を超えた実施や、倒立の際に肘が深くまがった実施、倒立に持ち込む際に著しく停滞した実施は不認定とした。

■E スコアについて

・縦向き３部分移動技において、角度逸脱がみられたものは一移動毎に減点をした。
・交差倒立技や倒立下りにおいて、倒立に上げる際に振動を有効に使用していないものや腰まがりがみられるもの、力の使用がみられるものは相応の減点をした。

3．その他特記事項・意見・感想等

今大会の決勝における落下者数は 21%（85 名中 18 名で 24 回）であり、３月に実施された選抜大会の 54%と比べて大幅に減少したことは、この夏に向けた準備がしっかりとできていたということであろう。しかしながら、一つの演技で２度落下をする選手が予選を含め多くいたことは今後の課題となると感じた。また、10 技で構成していた演技は予選 23%、決勝 48%であり、あん馬の種目特性上、高校生において 10 技で構成を組むのは厳しい一面があると感じた。

今大会において D スコアに対する問い合わせが予選で９件、決勝で３件あった。その内容は落下前の技の成立に関することや、縦向き旋回の認定に関することが多かった。落下前の技の成立に関しては、グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けられずに落下したものは不認定となるため、少なくとも半周旋回後の明確な背面支持がみられることが認定の条件となる。また、縦向き旋回の認定に関しては、主に縦向き後ろ移動技から前移動技に移行する際に「馬端中向き縦向き旋回(A)」が存在するのではといった質問内容であった。馬端中向き縦向き旋回は、技の終末姿勢である正面支持の際に片手が把手上でもよいと定義されているが、これは後に一把手上縦向き旋回を実施する際に用いられる（図１）ため、その後に縦向き前移動系の技が実施された場合は前移動系の技の一部として判定（図２）されることになる。下図を参考に改めて確認していただきたい。

図１

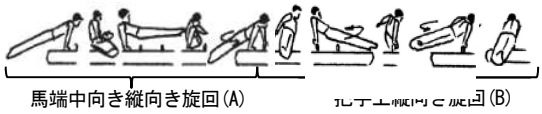


図２

近年、体をまっすぐに伸ばした姿勢でスピード感のある旋回や技捌きを実施する選手の数は格段に増えてきており、将来性を期待できる演技も数多くみられた。今後は更なる安定感と D スコアアップを目指し、日々のトレーニングに励んでいただきたいと強く感じた。

《つり輪》

D1/E1　梅田秀一

１．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版高等学校男子適用規則の確認
・演技全体として力強さを表現した演技構成を評価する。
・倒立や静止技での正確な姿勢と静止時間を評価する。
・演技全体を通して、安定感のある実施を評価する。
・D スコアを高めるために、高難度の力静止技や終末技を演技に組み入れてほしい。
・中水平支持や十字懸垂の後に肘をまげて逆懸垂になる捌きは減点の対象。
・逆懸垂での 2 秒以上の停滞も減点対象。

２．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

・け上がり脚前挙支持（２秒）において、支持局面で腕のまがりが 90°を超えた実施は不認定とし、脚前挙支持の静止がある場合には、脚前挙支持（ＩＡ）のみ認定した。
・力静止技で静止するべき姿勢を通過してしまい、静止が全く見られない実施は不認定とした。
・後方車輪倒立（2 秒）において、脚が 90°を超えて下がった実施は不認定とした。
・ヤマワキ、ジョナサンにおいて回転途中で明らかな支持局面が見えた実施は不認定とした。
・け上がり十字懸垂、後ろ振り上がり十字懸垂を同演技内に実施した場合には、特別な繰り返し（同一グループ・同一終末姿勢の技）として、一方だけを認定した。
・グループⅡ、Ⅲが３回を超えて連続されていた場合には、ルールに則り４回目以降を不認定とした。

例）①け上がり脚前挙支持（ⅢＢ）、②十字懸垂（ⅡＢ）、〇後ろ振り上がり支持（ＩＡ）
③脚前挙支持（ⅡＡ）、<u>④伸腕屈身力倒立（ⅡＢ）※削除</u>

■E スコアについて

・倒立姿勢においてロープへの接触や姿勢不良は相応の減点をした。
・脚前挙支持や十字懸垂といった技において、静止時間の不足している実施が散見された。
・後ろ振り上がり支持（ＩＡ）において、腕をまげての実施については相応の減点をした。

３．その他特記事項・意見・感想等

D 難度以上の力静止技に対して加点を与える規則が浸透した為か、D 難度以上の力静止技の実施数が多くなったと感じた。決勝では、37 名の選手が加点対象となる技を実施し、0.4 の加点となる選手も 4 名となった。その中でも、E 難度の後ろ振り上がり中水平支持や、ほん転十字倒立の実施が 7 例あり、より高難度の技を実施する意欲が感じられた。しかしながら、その質の面では差がある事から、質的な向上が今後も課題となる。

脚前挙支持、倒立といった基本的な技についてはロープに触れる事なく、正しい姿勢で実施する選手と、単に技として成立させているだけの実施とのレベル差が大きかった。伸腕屈身力倒立（伸肘倒立）を実施する際に、輪が内転し腕がロープにもたれかかる実施が多く見受けられた。

静止時間については、脚前挙支持等の基本的な技での不足が散見された。輪の揺れに合わせる事だけに意識を捉われると、演技全体が慌ただしくなる傾向にある。ひとつひとつの技を慌てる事なく、単純な技においても美しさと力強さを表現した演技が望まれる。

他の種目も同様ではあるが、基本的な技の習熟度を上げる事が E スコアを高めるためには必要であり、その技術基盤の上に高難度の技が積み重ねられる様、今後もトレーニングに励んで欲しい。

≪跳　馬≫

D1/E1　平田　和博

１．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版高等学校男子適用規則の確認
・高さと飛距離、および着地準備局面を示す雄大な跳越を評価する。
・着地を止めることができる、より正確で姿勢欠点のない雄大な跳越を評価する。
・着地減点の確認
・第 1 局面の足の開きの減点の確認

２．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

・伸身カサマツ等において大きく腰のまがりがみられた実施があったが伸身として判定し減点で対応した。ただし、伸身ツカハラにおいて 45°を超えて腰がまがった演技は屈身ツカハラとして判定した。
・ひねり不足については厳密に判定し、90°を超えて不足した場合は低い難度で認定した。

■E スコアについて

以下の実施に留意して減点をした。

・伸身姿勢での腰のまがり。
・第一局面での足の開き。
・着地で開いた足が肩幅以内で、脚を上げて踵を揃えるまたは踵を揃えない。
・倒立位を垂直に通過しない。

３．その他特記事項・意見・感想等

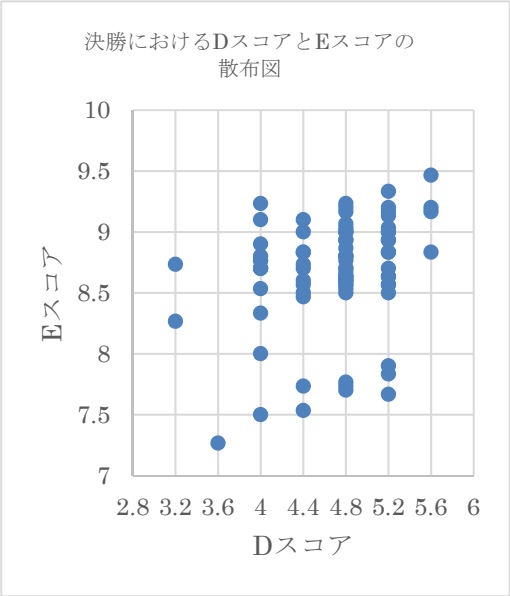
決勝での優勝者の演技はD5.6（ロペス）E9.466 計 15.066 で雄大さ姿勢ともに素晴らしい実施であった。以下、２位 D5.6（ジマーマン）E9.166 計 14,766、３位 D5.6（ロペス）E 9.2 計 14.7 であった。

決勝での技の内訳は 84 名中、ロペス２名、ヨーⅡ１名、ジマーマン１名、ドリッグス 19 名、伸身クエルボ 3/2 ひねり１名、アカピアン 32 名、伸身カサマツひねり９名、伸身ユルチェンコ 3/2 ひねり２名、伸身カサマツ 13 名であった。D5.6 が４名いるなど昨年度より D スコアがアップしているようであった。

着地の止まった選手は決勝７名であった。予選決勝両方で着地を止めた選手も２名いた。ほとんどが伸身カサマツやアカピアンでの着地であった。D5.2 以上で着地をとめた選手はいなかった。雄大な跳躍で着地の先取りができていた選手が着地を止めていたようである。また、せっかく着地が止まっているのに、「脚を上げて踵を揃えるまたは踵を揃えない」実施が複数見られた。跳馬だけでなくすべての種目で減点となるので注意してほしい。ライン減点は予選 22%、決勝 31%、転倒は予選 4%、決勝 11%であった。決勝での着地の乱れが多かったようである。

以前から言われていることであるが、ツカハラ系の技における第１局面での足の開きの減点が多いようである（決勝 31%　78 演技中 24 演技）。初期の練習段階から足を閉じて覚えてほしい。

右の図は決勝における D スコアと E スコアの散布図である。D と E の相関関係は相関係数 0.28 と薄くほぼ均等に分布している。D スコアが 4.8 以下の演技でも E スコア 9.0 以上が多くいた（20%、59 名中 12 名）。技の難度に関係なく雄大で美しく安定した演技を目指してほしい。



≪平行棒≫

D1/E1　高橋　義憲

１．採点上打ち合わせた事項

・2022 年度版高等学校男子適用規則の確認。
・ニュートラルディダクションの確認。
・雄大で美しさが求められた実施を評価する。
・ウォーミングアップ後に、第１演技者に対して最大で１分間の器械準備の時間を与える。

２．採点上起こった事項とその処理

D スコアについて

・静止技において静止がみられない実施は不認定とした。
・実施された技がコントロールされずに（器械上に）落下したものは不認定とした。
・「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」の支持局面で大きく屈腕になる実施は不認定とした。逆に明確な支持の後に屈腕になった場合は認定した。

Ｅスコアについて

・「前振り上がり」「け上がり」、「モイ」の大きさのないものは減点の対象とした。
・「後ろ振り倒立」は振動を有効に使い、伸身姿勢を保って倒立まで持ち込まなければならない。「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」などの後に力を使ったり、腰をまげたりして倒立に持ち込むものは減点の対象とした。
・静止時間が短い、または静止がみられない実施は相応の減点の対象となる。
・バブサー，モイ，チッペルトの振り下ろす際の膝の割れや懸垂時の膝の緩みなどは厳密に行う。

３．その他特記事項・意見・感想等

高校生適用ルールでは技数不足の減点（ND）が負担などを考え一般の８技未満からではなく７技未満と旧ルールで対応している中で多くの選手が８技以上で演技を構成していました。監督，選手の努力の結果だと思います。しかしながら，今大会非常に減点が多かったのが毎年言われていることですが静止時間の不足による減点です。予選，決勝と演技の中で２箇所，３箇所と減点が入る選手もいました。後ろ振り倒立，脚前挙，伸腕屈身開脚力倒立などしっかりと２秒止めないと大きな減点が伴いますので、今一度確認してください。演技を構成する中で多くの選手が「ツイスト」「ディアミドフ」を入れてきました。最終局面での倒立の決めや雄大性という部分で減点が入ってしまう実施が多く見られました。また「棒下宙返り支持」を実施してくる選手も多くいましたが，大きさのある実施は少なく感じました。今サイクルから「前振り上がり」の減点項目が厳しくなりました。その中でも大きさを出そうと多くの選手が頑張っていました。今後のトレーニングで１つ１つ克服してもらいたいと思います。

《鉄　棒》

D1/E1　三富　洋昭

１．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版採点規則、および 2022 年版高等学校男子適用規則の確認。
・雄大な手放し技、終末技、美しい体線の表現された倒立経過を伴うひねり技の評価。
・スピード感のある安定した実施と高い姿勢で止められた着地の評価。
・準備局面を有し、意識的に止められる終末技の評価。
・将来性の認められる演技に対する評価についても着目する。

２．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

・ヤマワキにおいて、明らかな腰のまがりの見られた実施や、伸身姿勢の表現が乏しい実施は B 難度(ボローニンまたは後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂)として判定した。
・伸身トカチェフは明らかな腰のまがりの見られた実施は、C 難度(屈身トカチェフ)として判定した。
・後方伸身２回宙返り１回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰のまがりの見られた実施は後方屈身 2 回宙返り１回ひねり下り（C 難度）として判定した。

■E スコアについて

以下の実施において厳密な実施減点とした。

・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になる実施。
・手放し技や終末技の前の車輪の膝まがり。
・車輪での単純な横への手のずらし。
・ひねりを伴う技の倒立位からの逸脱の角度（ひねり終わってバーを握った時点の角度で判断)。

３．その他特記事項・意見・感想等

決勝における D スコアの最高は 5.8 点、E スコアの最高は 8.766 点であった。終末技において、着地の止まった判定をした演技は 25 演技（内 D 難度以上の終末技 22 演技）あった。

予選、決勝を通し、演技の傾向としては、新ルールで閉脚シュタルダー（C 難度)、閉脚エンドー（C 難度）が難度表に入ってきたことから閉・開脚の両シュタルダーまたは閉・開脚の両エンドーを演技に取り入れる構成が多く見られた。また複数の手放し技を取り入れる構成も多くなってきたように感じた。これらは単独技での実施が多く、コバチ系、トカチェフ系ともに雄大さを感じられる実施があった。手放し技連続（C＋C）を実施し、組み合わせ加点（0.1）を得た演技が１演技あった。

実施について主に気になったことは、閉脚シュタルダー、閉脚エンドーについて、柔軟性の表現が乏しい実施が多かったように感じたこと、逆手背面車輪において、肩転位が曖昧な実施が多く見られたこと、手放し技の前や終末技の前の車輪において膝のまがる実施が多く見られたこと、また、後方伸身 2 回宙返り１回ひねり下りの腰のまがりが散見されたことである。

これらについて改善に努め、美しさ、力強さが表現された演技を目指し、今後も日々一層練習に励んでいただきたい。